

13 泉屋家文書の外科資料蘭文断簡から

わかった本木正栄の医書

相川忠臣¹⁾・ハルメン²⁾ ボイケルス

平成十年に長崎の旧家泉屋家で見つかった文書がシーボルト記念館に寄贈され、その文書中の外科資料断簡の調査を依頼された。その調査結果の一部は既に一〇二回の本学会で報告した。この外科資料断簡はオランダ通詞本木庄左衛門(正栄)(二七六七—一八二二)によって原書から書き写された蘭文とその和訳文からなる草稿である。

医学に関する断簡、蘭十一、和十一、蘭一、和十四と和二十八を正栄の筆とされる諸厄利亜国語和解、諸厄利亜語林大成や拂郎察辭範の草稿と比較した。蘭文の文字の特徴や和文のカタカナの書き方等から判断して、そのどれもが本木正栄の筆跡であった。それらの断簡を分析した結果、原典となった四冊の蘭医書を同定できたので

報告する。

蘭十一に含まれる蘭文断簡を継ぎ並べて Laurens Heister 著 *Heelkonstige onderwijzingen met aanmerkingen*. 蘭訳 Hendrik Ulhoorn, Deel 1 2e druk Amsterdam 1755 の第一章と照合すると良い一致をみた。和二十八と蘭十一の和文はその訳であった。

和十一の蘭文断簡一枚は Ambrosius Pare 著 *De chirurgie ende opera van alle*. 蘭訳 Carolus Battus を書き写したもので、背中の接合した双子の絵とその前後の文章である。絵部分は原書の絵とびたりと一致する。蘭文の書かれた紙の一部に原書の絵を重ねてトレースして写した絵紙が張り合わされていた。一六五五年と一六二七年(平戸の松浦史料博物館)のアムステルダム版と比較してスペルに違いがあり、原書はもっと新しい版であろう。

蘭一の断簡(C22)と和十四の断簡(S8)はきれいに接合できて蘭文の判読が可能となった。内容は *Cataracta* (白内障) の説明文である。平戸の松浦史料博物館にある Johannes Jacob Woyt 撰 *Gazophylacium medico-*

physicum of schat-kamer der geneesen natuurkundige zaken. 蘭訳増補注解 Joann Christ Schmel-lentin, Amsterdam 1741. (医薬宝函) の Cataracta の項と一致する。蘭十一の断簡(110)の Pterigium (翼状片) は断片なので文章とならないが、同じく医薬宝函からの引用であろう。和十四には和訳文の中のカラクタアとプテリキウムの次にそれぞれ説明のための小文字の書き込みがある。

和十四は Bernardus de Bout 著 't Nieuwe examen der chirurgie na de hedendaagse prectijk (現代の実地医家のための新外科問考) を書き写して翻訳したものであり、新発見である事を一昨年報告した。この小冊子は外科の入門書である。和十四には蘭文と和訳文が交互に並び、朱書の書き込みが多く、訂正のための朱書も多いので正栄の若い修行時代の断簡であろうか。Cataracta の蘭文も小文字の朱書の書き込みである。一方和二十八と蘭十一-18 の和文には書き込みはなく清書されたものである。

大槻玄沢は天明五年(一七八五年)長崎に遊学、本木

良永宅に下宿しハイステルの外科書の翻訳の指導を良永や吉雄耕牛に受けた。下宿先の若い正栄とは深い交流があった。正栄は外科入門書のデュバウトの新外科問考をウォイトの医薬宝函を使用して翻訳し、さらに進んで本格的なバレやハイステルの外科書の翻訳をしていた。若い正栄は玄沢と競ってハイステルの外科書を翻訳していたのではなからうか。

(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科)¹⁾

(ライデン大学医学部)²⁾